

令和元年6月6日現在

機関番号：43919

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04642

研究課題名（和文）グローバル世界における近代的歴史教育形成の比較研究

研究課題名（英文）Comparative study of modern history education formation in the global world

研究代表者

武 小燕（WU, XIAOYAN）

名古屋経営短期大学・子ども学科・准教授

研究者番号：00634578

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国、トルコ、ドイツ、アメリカといった諸国が近代世界におけるグローバル化の拡大に対していかなる史学的アプローチで対処し、かつ学校教育を通してそれを普遍化してきたかを検討したものである。

宗教的にも文化的にも大きく異なるこれらの調査国における近代的な歴史教育の形成と展開は、伝統史学の有無、伝統史学と近代史学との関係、グローバル化の影響の大小によって多様なあり方を示している。歴史教育で提示される自国観と世界観も多様性に富んでいる。この多様性を認識するところから、各国で自明視されがちな自国観・世界観を再考し、今日の歴史教育改革に対してより広い視野から現実的な対応が提案できよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は中国、ドイツ、アメリカ、トルコというそれぞれ異なる形で近現代世界に参与した諸国に注目し、近代的な歴史教育の誕生とその後の変容を分析した。それにより各国における伝統史学と近代史学の葛藤と継承並びに国民形成と世界理解の関係性を描出し、近代的歴史教育に潜む普遍性と多様性を指摘することができた。

以上の研究成果は、第一に東アジアに緊張をもたらしている歴史認識についての再考を促す点に意義が認められ、第二に今日の日本における歴史教育改革に対して示唆をなすものと考えられる。すなわち自国史と世界史の統合を目指す「歴史総合」の意義と課題を追究する際に有意義な視点を、国際比較によってもたらしたのである。

研究成果の概要（英文）： This study examines what historical approaches have been introduced in the school education of China, Turkey, Germany, and the United States in order to cope with the development of globalization since early modern times.

The process of formation and spread of modern historical education of these countries is rich in diversity depending on presence or absence of traditional historiography, the relationship between traditional and modern historiography, and the extent of the influence of globalization in each country. The views of the own country and the world presented in history education have been also diverse.

Recognizing such diversity, we can reconsider our views of the history of own country and the world that are assumed self-evident in each country, and it will be possible to make a realistic proposal on today's historical education reform from a broader perspective.

研究分野：教育学

キーワード：歴史教育 グローバル 国民形成 世界認識 教科書 史学 伝統 近代化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

21世紀以降、グローバル化の進展が加速するが、それは世界の同質化をもたらす側面がある一方、国や地域の独自性を強調する言動の台頭ももたらしている。2000年代以降、中国も日本も伝統文化の価値を強調し、それを国民の再統合に利用しようとする動きがその好例である。こうした問題について比較国際教育学では、スタンフォード大学のカーノイがグローバル化は、世界レベルで「文化的単一性を好む」一方、独立を目指すカタール・ニヤのような「特定の民族的あるいは地域的グループと特に肯定的な関係を」築く場合もある(カーノイ.M.『グローバル化と教育改革』2014年、pp.69-71)と述べている。すなわち世界を覆う経済的潮流が各地で引き起こす反応は様ではなく、その反応の多様性の原因には歴史的に形成されたそれぞれの社会の基本的な価値観やそれを背後から支える世界理解があると考えられている。こうした理解に基づき、本研究は、東アジアにおける緊張関係の改善により根本的なところから取りくむため、グローバル化と国民形成が始まる近代国家成立期の歴史教育に注目し、それ以降の自国理解と世界理解がどう形成されてきたかを調査分析する必要の認識から出発した。

### 2. 研究の目的

グローバル化とともに始まる近現代世界において、調査対象の国々では近代史学の普及という学校教育の課題と、それ以前に存在した伝統的な歴史把握とのあいだで葛藤が生じた。その内容とその結果を明らかにすることが、本研究の第1の目的である。さらにその作業を基礎として、各国の共通点と相違点を確認することにより、いまでもその痕跡を残している、近現代世界と自国を中心とする国民国家に関する理解についての文化的・宗教的な多様性と対立点を描き出すことが第2の目的となる。調査対象国は、近代化の過程が大いに異なる中国・日本・トルコ・ドイツ・アメリカの5か国とすることにより、近代的歴史教育形成の共通性と各国の特性を検討し、東アジアの歴史教育における自国認識と世界認識の相対化を図る。

### 3. 研究の方法

本研究は、主として図書館ならびに文書館における文献資料に基づいて進められた。関連する先行研究の精査に加え、近代以降の歴史教育に関する教育政策、学習指導要領、教科書、教育雑誌、そして歴史教育の歴史観を影響する史学上の議論、主な史学者の論調を中心に分析した。また必要に応じて歴史教育研究者へのインタビューを行い、先行研究でまだ十分示されていない新しい見解を踏まえた研究を推進した。

各研究者の研究内容と進展状況を共有できるように、初年度に3回、次年度に2回、最終年度に1回の研究会を開催したほか、メールによるレジュメの連絡や報告を随時に行い、進展状況の共有と調整をこまめに行った。調整によって生じた大きな変化は主に次の2点である。一つは対象国が日本・中国・トルコ・ドイツ・アメリカの5か国から中国・トルコ・ドイツ・アメリカの4か国に変わったことである。これは決して日本研究の重要性がないというわけではなく、むしろ本研究における基礎作業を踏まえた上で今後特に日本に焦点を当てた研究を行う必要性を感じたためである。すなわち、今回は2名の研究者がそれぞれ古代中国と近代中国の歴史教育に専念し、古代中国と近代中国における歴史観の断絶と連続をより深く検討することを図ったが、これは東アジアの緊張要素の一つである中国の歴史教育への理解の精度を高めると同時に、日本の歴史教育における儒教文化の影響及び近代以降形成された独自の歴史観と近代中国の歴史観の異同をより丁寧に考察することができると考える。もう一つの調整結果は、執筆内容を歴史教育の草創期から今日までの長い期間とすることであった。長期的な変容を視野に入れた検討はグローバル化の進展とともに歴史教育の変化というマクロな視点により対応できると考える。

### 4. 研究成果

今回の科研で雑誌論文5点、学会発表12点、図書12点の研究成果を得ることができた。国別に簡潔にまとめると次のことが示された。

中国の歴史教育は長い伝統があるが、それを規定する史学は長い間に独立した学問ではなく、経学の一部であり、特に科挙制度以降の教育を通して王朝統治のイデオロギーの装置として機能してきた。一方、宋以降盛んになった朱子学への批判として明清時代に考証学が隆盛し、歴史主義としての漢学の勃興は近代以降の史学革命の土台を築いた。アヘン戦争ならびに日清戦争後、西洋の新史学や日本の東洋史学の影響を受け、近代的史学の構築が進められ、新しい歴史教育の可能性が生まれた。また1900年代に科挙制度が廃止され、近代的な学校教育制度の構築が試みられたが、それは間もなく中華民国の学校教育に取り変えられ、近代的な歴史教育が国民教育のなかに組み込まれた。続いて1920年代には考証学の伝統を引き継ぎながら新文化運動と新史学の影響を受けた疑古派が登場し、急速に人気を得た。疑古派の批判性と考古技術等の科学の発展により、「経世致用」の歴史観でなく、客観性を旨とする史料中心の歴史観が民国期の史学界を風靡した。この時期の歴史教科書はその影響を受けて編纂されたものが少なかった。

一方、マルクス主義の歴史観はロシア革命後中国に登場し、世界恐慌後大いに注目された。それは1930年代に、中国社会の行方に関する議論が高まり、また日中戦争によって社会状況

が厳しくなるにつれて急速に普及した。共産党が支配した中華ソビエト共和国では唯物史観を反映する歴史教科書が編纂され、その史観と歴史教育のあり方は後に新中国成立後、全国的に広がった。文革期には、唯物史観の歴史家さえもが批判する、行き過ぎた階級論解釈の歴史教育が展開されると同時に、新中国政権に批判された疑古派を中心とした古代文献整理の国家プロジェクトが実施され、史料中心の歴史観が限定的ながらも受け継がれていた。そして改革開放期になると、文革期の歴史教育が否定され、本来の唯物史観と史料中心の歴史観が復帰するが、東欧激変と天安門事件の影響をうけて唯物史観の影響力は後退し、史料中心歴史観は民国研究ブームの高まりと共に影響力を拡大しつつある。それは歴史教育において史料分析能力をはじめとする歴史資質の形成を重視する教育改革をもたらした。中国の歴史教育は、古代の内なる歴史観から近代以降の常に外部の影響を受けた歴史観へと変容してきたが、その過程では世界を席卷するグローバル化の影響とその影響に対する国内の様々な思想の対立が見られる。

トルコの歴史教育はその前近代のイスラム世界における教育と近代オスマン帝国における教育改革に遡ることができる。トルコ共和国以降、公定歴史学が推進されたが、アタテュルクの死後、公定歴史学は失速し、今日親イスラム派によるオスマン帝国史重視の潮流が高まっている。こうした歴史教育の変容は国際社会におけるイスラム世界の変化および、近代以降西洋文明の影響を受けながらも、それに対抗するナショナリズム運動の働きがあった。

ドイツでは民衆を対象にした教育という発想は宗教改革に端を発している。歴史教育は 16 世紀における歴史教育への関心の発生とその後の漸進的な拡大、特に 19 世紀に生じた爆発的な普及、そして 20 世紀後半における歴史教育学の形成という段階を経て変容してきた。その形成と発展の過程において歴史教育は常に主権国家と結びつき、多少の時差を伴いながら主権国家の変容に追従してきた。今日、学校における歴史教育の意義は不明確になりつつあるが、それはヨーロッパ統合の進展や経済のグローバル化による国民国家の相対化という状況を反映していると考えられる。

アメリカでは前近代の自国史が薄く、19 世紀中葉以降、ヨーロッパからの知的独立を目指し、アメリカ人としてのアイデンティティへの関心が急速に高まった。学校教育ではそのナショナル・アイデンティティの形成に中心的な役割を果たす公民科は 19 世紀後半に普及し、20 世紀初期に公民と歴史が統合する形でアメリカ独自の「社会科」が誕生した。公民科から社会科へ変わった背景には、革新主義運動や新移民の流入、アメリカ化運動、社会科学全般の発展があった。20 世紀前半には、政治史中心ないし WASP 中心史観の歴史教育が展開されたが、公民権運動の影響を受け、1960 年代以降教科書の記述は徐々に多文化社会を反映するものへと変容した。グローバリゼーションがアメリカの歴史教育に与えた影響は直接的なものというよりは間接的なものであった。すなわち、アメリカ国内に入ってきた多様なエスニック集団の存在と人権運動が歴史教育の変容に大きな影響を与えたのである。

上記の研究を通して、伝統史学の有無、伝統史学と近代史学との関係、グローバル化の影響の大小という点で、各国の状況には多様性が大きいことが明らかになった。このことは、近代的な歴史教育の形成と展開がそれぞれ異なる在り方を示し、そこで提示された自国観と世界観も多様性の富むことと対応している。こうした多様性を認識することから、各国で自明視されがちな自国観・世界観を再考し、今日の歴史教育改革に対してより広い視野から現実的な提案をすることが可能となろう。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 5 件)

小笠原弘幸「(書評)セズギ・ドゥルグン著『王の領地から祖国へ』」『史淵』(154) 2017 年 3 月、pp.147-154。

小笠原弘幸「トルコ共和国建国期の歴史教育におけるイスラーム史 教科書の記述分析より」『2016 年度大学研究助成 アジア歴史研究報告書』2016 年度、pp.95-115。

小笠原弘幸・秋葉淳(監訳)「原典翻訳:ユースフ・アクチュラ『三つの政治路線』」『史淵』(155) 2018 年 3 月、pp.135-165。

近藤孝弘「新自由主義教育改革と歴史教育の課題」『歴史評論』(819) 2018 年、pp.5-15。

岡本隆司「長崎の聖堂と孔子廟 日中の近世と近代」『史林』101(6) 2018 年 11 月、pp.109-126。

### 〔学会発表〕(計 12 件)

近藤孝弘「『歴史総合』の課題をドイツから考える カリキュラム改革の差異をめぐって」日本歴史学協会歴史教育シンポジウム、2016/10/22、駒沢大学(招待講演)。

近藤孝弘「思考力を重視する歴史の大学入学資格試験のあり方について アビトゥア試験を中心に」日本西洋史学会、2017/5/21(招待講演)。

岡本隆司「中国『ギルド』論の系譜」社会経済史学会第 86 回全国大会パネル報告「近代中国の経済『制度』のモデル」、2017/5/28、慶應義塾大学。

岡本隆司「『近代』の視点を問いなおす」明清史夏合宿 2017 シンポジウム「明から清へ 世界秩序観の持続と変容」コメント、2017/8/9、聖護院御殿荘(京都)。

岡本隆司「『大君主』の興亡 近代東アジア国際関係における韓国の独立と君主号」韓国・日本史學會 2017 年度日本史學會國際學術大會《日本外交政策の歴史的展開と東アジア国際関係》、2017/10/14、ソウル・高麗大學校（招待講演・国際学会）。

岡本隆司「『白眉』の運命 『モリソンパンフレットの世界』を上梓して」モリソン文庫渡来 100 周年記念国際シンポジウム「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」、2017/12/16、東京・東洋文庫（招待講演）（国際学会）。

武小燕「近代中国の歴史教育の展開 自国観と世界観の変遷」日本現代中国学会東海部会第 10 回研究集会、2018/2/24、愛知大学。

武小燕「近代中国の歴史教育における世界史の位置づけ 国際視野の育成は何を意味するか」日本比較教育学会第 54 回大会、2018 年 6 月 24 日、芸術文化ホールくらら（東広島市）。

岡本隆司「『東方問題』から『朝鮮問題』へ 宗主権をめぐる国際法と翻訳概念」第 18 回日韓歴史家会議「国際関係 その歴史的考察」日韓歴史家会議組織委員会主催・公益財団法人日韓文化交流基金共催、2018 年 11 月 16～18 日、ホテルサンルート有明（東京都）（招待講演・国際学会）。

貴堂嘉之「奴隷制における「近代」とは何か アメリカ合衆国の奴隷制研究史を中心に」第 116 回史学会大会公開シンポジウム（「『奴隷』と隷属の世界史」）、2018 年。

貴堂嘉之「『移民国家』アメリカという歴史の教訓」ILO 協議会海外社会労働事情研究会、2018 年。

近藤孝弘「ドイツとオーストリアにおける政治教育と歴史教育の展開」早稲田大学公民教育研究会、2019 年。

〔図書〕（計 12 件）

岡本隆司『中国の論理 歴史から解き明かす』中央公論新社、2016、232 頁。

阿古智子・大澤肇・王雪萍・武小燕ほか『変容する中華世界の教育とアイデンティティ』国際書院、2017、306 頁。

杉村美紀、近藤孝弘ほか『移動する人々と国民国家』明石書店、2017、208 頁。

斯波義信・岡本隆司編著『改訂増補モリソンパンフレットの世界』東洋文書、2017、455 頁。

岡本隆司編著『G・E・モリソンと近代東アジア 東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』勉誠出版、2017、312 頁。

貴堂嘉之ほか『新自由主義時代の歴史学 第 4 次現代歴史学の成果と課題 1』績文堂出版、2017、303 頁。

岡本隆司『世界史序説 アジア史から一望する』ちくま新書、2018 年、265 + iv 頁。

岡本隆司『近代日本の中国観 石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』講談社、2018 年、229 頁。

岡本隆司『歴史で読む中国の不可解』日本経済新聞出版社、2018 年、222 頁。

貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波書店、2018 年、235 頁。

貴堂嘉之ほか『歴史学者と読む高校世界史 教科書記述の舞台裏』勁草書房、2018 年、261 頁。

小笠原弘幸『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会、2019 年、296 + ix 頁。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：

国内外の別：

〔その他〕

国際共同研究；鄭圭永（韓国清州教育大学）「韓国近代の歴史教育における『国の起源』と『民族』の発明」「グローバル世界における近代的歴史教育形成の比較研究」H29 年度第 1 回研究会、2017 年 8 月 6 日、名古屋経営短期大学。

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：近藤孝弘

ローマ字氏名：KONDO Takahiro

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：教育・総合科学学術院

職名：教授

研究者番号（8桁）：40242234

研究分担者氏名：岡本隆司

ローマ字氏名：OKAMOTO Takashi

所属研究機関名：京都府立大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：70260742

研究分担者氏名：小笠原弘幸

ローマ字氏名：OGASAWARA Hiroyuki

所属研究機関名：九州大学

部局名：人文科学研究院

職名：准教授

研究者番号（8桁）：40542626

研究分担者氏名：貴堂嘉之

ローマ字氏名：KIDO Yoshiyuki

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：70262095

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：鄭圭永（韓国清州教育大学教授）

ローマ字氏名：Kyu-Young, Chung

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。